

ホクとハックマン

文 長谷川踏太

ホクかハックマンと出会ったのは毎日のように通っていた駄菓子屋さんのゲームコーナーでした。また小さかったホクはゲームをやるほとのおこっかいは持っていなかったのて、自分より年上のヤンキーっぽいお兄さんかゲームをしている背中越しからハックマンかハクハクとエサを食べ続ける姿を食い入るように眺めていました。なのてハックマンは当時のホクにとっては「やるもの」ではなく「観るもの」でした。

そのお兄さんはゲームかとても上手なのて、彼かハックマンをやっているときはホクのような子供達にいつも囲まれていて、フロ野球のスター選手のようにでした。彼かゲーム中にお腹かすくと、お金を渡されアイスやうまい棒を買って来くるのか、僕たちの日課でした。

ゲームかてきないかわりに、ハックマンこつこといって、キャハツ太郎という丸い形のスナック菓子を床にならへ、ハクハクとそれを這いつくはりながら食へていくという遊びをやって、親に「汚いからやめなさい」としかられた事もありました。ある日、いつものようにハックマンを観ていると、お兄さんかホクの方に振り向き「ちよつとやってみるか？」と言って、1フレイだけ遊はせてくれました。すつと見ていたのでかなりやれるはずだと自信満々で臨んだのですか、開始して間もなく一度通つてみたかったワーフトンネルのところでモンスターにふつかり、あっけなく終了。あまりに下手くそでフライトか傷つき、お兄さんにお礼も言わず、逃げるようにしてその場を去りました。

それ以来、駄菓子屋さんのゲームコーナーに行きつらくなり、足か遠のいていたのですか、久しふりに行つてみると、いつものようにお兄さんかハックマンをやっています。しかし前のようにキャラ▲リーが一人もいません。彼らは、新しいゲーム機をやっている別の人の後ろに群がっていました。なんだかパックマンをやっているお兄さんの背中が寂しそうに見えて、ボクは、「お兄さんは新しいゲームやらないの?」と話しかけてみました。すると、お兄さんはゲームの画面をみつめながら、「オレはシンプルな方が好きだからね。新しいゲームはどうせすぐ飽きちゃうよ」と言いました。

ボクはシンプルという言葉の意味も知りませんでしたか、なんとなくお兄さんの言おうとしたことがわかったような気がして、ちよつと大人になったような気持ちで、お兄さんのやるパックマンをずっと眺めていました。